

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名(姓、名)	チン ギョウシ CHEN Xiaozhi		授与番号 甲 1620 号
学位の種類	博士(文学)	授与年月日	2022年 9月 25日
学位授与の要件	本学学位規程第18条第1項該当者 [学位規則第4条第1項]		
博士論文の題名	坂口安吾初期文学研究 —— 〈仏教〉と〈笑い〉を中心に——		
審査委員	(主査) 瀧本 和成 (立命館大学文学部教授)	浅子 逸男 (花園大学名誉教授)	
	内藤 由直 (立命館大学文学部教授)		
論文内容の要旨	<p>本論文は、序と結および全五章で構成されている。各章は以下の通りである。</p> <p>序章</p> <p>I 安吾の初期文学と文壇状況</p> <p>II 安吾の初期文学における仏教的なものと研究の視座</p> <p>III 本論の目的と構成</p> <p>第I章 坂口安吾『黒谷村』論</p> <p>第II章 坂口安吾『村のひと騒ぎ』論</p> <p>第III章 坂口安吾『禅僧』論</p> <p>第IV章 坂口安吾『閑山』論</p> <p>第V章 坂口安吾『勉強記』論</p> <p>結章</p> <p>本論文は、論文タイトルにもあるように坂口安吾の初期文学研究、とくに仏教的な要素と〈笑い〉の要素を導入して描出した小説「黒谷村」、「村のひと騒ぎ」、「禅僧」、「閑山」、「勉強記」を取り上げ、分析・考察したものである。</p> <p>第I章は、小説「黒谷村」を取り上げ、人物造型にある「知識人」という側面を重視して、龍然と凡太の人物形象を深く考察している。続いて自殺した男の話の内実を分析して、さらに「黒谷村」のモチーフとなった萩原朔太郎の「死なない蝸」、倉田百三の『出家とその弟子』との受容関係を緻密に考究している。そのうえで作品の主題及び作者安吾の執筆意図に迫っている。</p> <p>第II章は、小説「村のひと騒ぎ」を論じている。まず作品内の言語表現の特徴と作品構成(構図)の面から多層的な〈笑い〉を抽出し、作品における〈笑い〉の多様性、重層性を明らかにしている。次に「理知」を重視する〈笑い〉の時代風潮に反して、「感じる」ことを重視する安吾の〈笑い〉観の内実を考察したうえで、井伏鱒二や中村正常などの「ナンセンス」文学との違いを明確にし、安吾の〈笑い〉観の独自性を究明している。また、「生き返し」(仮死)という要素を取り入れたことを切口として、安吾におけるエドガー・アラン・ポオ</p>		

<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">論文内容の要旨</p>	<p>への受容の有り様を明らかにし、作品に見られる安吾の芸術観を追究している。</p> <p>第Ⅲ章では、小説「禅僧」を取り上げ、論究している。まず安吾における「気候」と「理知」の関係性を把握し、それらがどのように「若者」の人物造型に反映され活かされているかを考察している。続いて、お綱の人物形象分析、とくにお綱にかかわる性的描写(表象)に着目し、その背後にある作者の意図(仕掛け)を追究している。さらに医者的人物造型に関連して、(文学における)「デカダンス」や(社会における)「モラル探求」の問題も視野にいれて考察を行っている。それらを踏まえた形で安吾の「知識階級」に関する言説や「デカダンス」と「アンモラル」(「無道徳」)といった思索に敷衍して禅僧の人物形象をさらに深く分析考察している。また、作品の文体にも注目し、〈問わない語り方〉と説話体の効用を分析し、作者の意図を明確にしたうえで作品の位置づけを行っている。</p> <p>第Ⅳ章では「閑山」を鑑賞、読解している。作中描かれる狸の滑稽的な形象、〈和尚〉と〈放屁〉の組み合わせや屁の視覚的な表現などに着目し、〈笑い〉に焦点を当てて、「閑山」にある「滑稽味」はどのように成立しているか、そして、「滑稽味」を描出する作者の意図は何処にあるのかを明確に提出している。さらに、作品における禅の表現にも着目して、「花の文字」の意味を作品の主題と結び付けて論説している。</p> <p>第Ⅴ章では「勉強記」を考察している。まず、作中人物栗栖按吉や語り手による〈笑い〉の位相を分析して、作品における〈笑い〉の多層的な要素を引き出し、作品「勉強記」の〈笑い〉の独自性を考察している。続いて、当時の時代・社会状況を手掛かりに、「主義者」として描かれる人物形象の持つ意味を按吉の「悟り」への執着と放棄の過程と絡めて論究し、作品の主題と作者の意図を提示している。</p> <p>最終章では、まず考察してきた全五章の論点(問題提起と結論)を纏めている。そのうえで安吾初期文学における仏教的な要素、と〈笑い〉の要素がどのように各作品に表現され、描かれているか、その共通点とそれぞれの独自性を明確にしている。また、それらの視点が各作品の主題と作者の意図とどのように絡み、繋がっているかも論及している。そうした分析・考察を経て坂口安吾初期文学の価値(意義)とその位置づけの再検討を行っている。</p>
<p style="writing-mode: vertical-rl; text-orientation: upright;">論文審査の結果の要旨</p>	<p>審査は、主査瀧本和成、副査内藤由直、浅子逸男の三名で行った。</p> <p>本論文は、坂口安吾の初期作品に於いて仏教的要素と〈笑い〉の要素がどのように表現され、作品に描出されているか五作品を取り上げ、考究しているところに特徴がある。従来の先行研究や発掘された資料を精査し、その問題点を指摘したうえで、上記に示された作品一つひとつを緻密に分析、解読し、作品主題及び作者の意図に迫っている。また、その当時の時代・社会・文壇状況も視野に入れ、坂口安吾の文学観や読書にも着目し、その影響も視野に入れて論究している。具体的に示すと、本論文の成果は、五点挙げられる。第一は、対象作品の鑑賞を第一義に、先行論文を批判摂取しながら緻密に言語(表現)の多義性や重層性を考察していること。第二に、人物造型と作品の構成を分析して、作品の主題や作者の意図を究明する作業を緻密に行っていること。第三に、(上記の通り、)時代・社会・文壇状況や安吾の読書体験等を視野に入れて、他の同時代の作家(・作品)との受容・影響関係を探りながら、安吾の文学観(芸術観)の独自性を浮き彫りにしたこと。第四に、初期文学作品に於ける〈仏教的〉要素と〈笑い〉の要素を精緻に抽出し、それらの表現の特質や多様な意味について緻密に分析できていること。第五に、こうした考察を通して初期文学の位置づけと評価を行っていること。時代状況や背景、安吾の置かれていた環境を資料提示しながらしっかり踏まえつつ、作者と作品を有機的に繋げ、作品を分析・考察したことにより、作品の立体的な解釈(多面的かつ緻密な読解)が実現できており、孰れもこれまでの先行研究に見られない読解の深さを示し、その実証力を有した研究として結実している。</p>

論文審査の結果の要旨	<p>今後の研究課題としては、初期文学作品に見られる〈仏教的〉要素、〈笑い〉の要素共に、古典文学・演劇(能・狂言)からの影響関係の詳細な検討、1920～40年代に於ける日本文学の中での坂口安吾文学の位置づけと評価が求められる。しかしながら、それらの課題点は聊かも論全体を損なうものではなく、本論文が創意に満ちた優れた博士論文として高い水準にあることは、審査委員の一致した意見であった。以上、公開審査とそれを踏まえた審査委員会判定会議の議論により、審査委員会は本論文が本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しい水準に達しているという判断で一致した。</p>
試験または学力確認の結果の要旨	<p>本論文の公開審査は2022年7月11日(月)15時00分から17時00分まで、衣笠キャンパス末川記念会館2階第1会議室にて行った。学位申請者による論文要旨の説明の後、審査委員は学位申請者に対する口頭試問を行った。審査委員会は、公開審査において本論文の主要分野である日本文学および近代文学での研究史について、学位申請者の文学的事項に関わる知識、主要な研究者とその研究史的意義について試問し、それぞれについて十分な回答を得ることができた。また、本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程の在籍期間中における学会発表などの様々な研究活動の学問的意義についても質疑応答を実施した。それらを通じて学位申請者が博士学位に相応しい能力を有することを確認した。したがって、本学学位規程第18条第1項に基づいて、博士(文学 立命館大学)の学位を授与することが適当であると判断する。</p>